



「いなづまや」

向井去来

向井去来は松尾芭蕉の高弟、蕉門十哲の一人である。長崎市興善町で生まれ、京都「落柿舎」を結び、『猿蓑』の編集や『旅寝論』『去来抄』などの俳論でも知られる。

去来の来崎は二度だが、卯七と共に『渡鳥集』を編纂するなど故郷への思いは強かった。長崎市内には七箇所ので去来関係の碑があり、丸山・料亭花月前の句碑には次の一句が刻まれている。

いなづまやどの傾城とかりまくら
一年余り滞在した二度目で最後になる来崎中に
吟じた句である。

この他にも『渡鳥集』の冒頭を飾る

故郷も 今ばかり寝や 渡り鳥

や、最初の来崎で詠んだ唯一の句

君が手もまじるなるべし花薄

(『猿蓑』所収)

なども長崎では馴染み深い。